

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.171

November 2009

《わたしたちのアメリカ》がある場所

藤 平 育 子

私は、*American Literary History* (Oxford UP) に掲載される論文の多くからしばしば大きな啓発を受ける。このジャーナルでは、アメリカ文学／文化研究のその時々課題が、大学や大学院のアメリカ文学の授業で何を教えるのかという現実問題を含めて議論される。

1994年に出た Carolyn Porter の60ページに及ぶアメリカ文学研究への提言(“What We Know That We Don’t Know” [Vol. 6, No. 39: 467-526])は、今や多くの研究書や論文に引用され、21世紀のアメリカ文学研究への指標となったと言ってよい。20世紀の終わり近く、いわゆるニューアメリカニストの業績は、それまでの古典的アメリカ文学に、アフリカ系、ネイティブ・アメリカン、女性、アジア系、さらにはチカーナ文学までを包含したことだろう。しかし今や、それを超えて、ラテン・アメリカ文学と合衆国文学との関係を論じる時が来ているとポーターは力説したのだった。

ポーターがとくに注目したチカーナ文学研究者 José David Saldívar (*The Dialectics of America* [1991]) は、合衆国とメキシコの国境が歴史的かつ地理的に形成された経緯を踏まえたうえで、カリブ地方とラテン・アメリカとを北米にリンクする文化的ネットワークを、地理的、政治的国境に跨がるボーダーランズとして前景化する。1891年、キューバの革命家詩人 José Martí は、「わたしたちのアメリカ」とわたしたちの場所ではない「他のアメリカ」とのあいだには深い溝があると指摘し、合衆国を越えた大きな地域を指す「アメリカ」を“Nuestra America”と呼んだ。

南米コロンビアの作家、Gabriel García Márquez は、1982年12月ノーベル文学賞受賞講演において、「隣人」の北米はいまだにこの「わたしたち」のことを知らない、「わたしたちのものではないもの」の見方でわたしたちの現実を解釈しても、それはただわたしたちをさらに知らない存在とし、わたしたちをいっそう孤独にするだけ

だ」と訴えた。さらにマルケスが、「私の師匠、ウィリアム・フォークナーは(ノーベル賞受賞講演[1950年]において)人類の終焉を受け容れないと述べた」と賞賛したのは、フォークナーのユートピア的見解に魅せられたからだ、サルディヴァールは説明する。フォークナーの言葉は、広島と長崎への原爆投下以降、人間の想像力はもはや、人類が一瞬のうちに滅亡するという恐怖から逃れられないという意識、大江健三郎の言葉を借りるなら、「核時代の想像力」の宿命を物語るものだった。しかし、マルケスもフォークナーも、作家の豊かな想像力／創造力は、世界の不調和と人類滅亡の危機を乗り越えられるという希望を語っている。

マルチニークの作家 Edouard Glissant は、フォークナー文学を流動する「フロンティア」に位置づけ、アルジェリアとフランスの狭間に生きたアルベール・カミュやガダル・ペー出身の詩人 Saint-John Perse と並べて論じている(*Faulkner, Mississippi* [フランス語版1996年])。グリッサンは、フォークナー文学はミシシッピという小さな場所から広大な意味の領域を横断してゆらめき、「その想像界は伝染し感染していく」と主張する。この春、メキシコに発した新型インフルエンザが即座に隣国アメリカ合衆国へ、そして世界中に伝染したことは歴史の皮肉にも見える。

私は昨年フィラデルフィアに滞在し、オバマ大統領誕生の一部始終を見て何度も涙を禁じ得なかった。歴史を変革する勇気を持ったアメリカ市民を心底から敬服するが、経済危機のさなかにあって、重責を背負いながら、世界から核兵器をなくそうと訴える新大統領にも絶大な勇気を見る。いつの日か、《わたしたちのアメリカ》が政治的にもボーダーランズとなるかもしれない、と夢見つつ。

(中央大学)

『アメリカ研究』第45号原稿募集

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は、2011年3月に第45号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文、もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することは出来ません。これは、なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33行×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で8ページ以内。ほかに英文レジュメ（500語）。執筆要項は、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日 2010年9月7日（火）。学会事務局に必着のこと。
4. 提出部数 3部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は、論文題目に簡単な説明を付けて、2010年6月末日までに電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第45号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第45号の特集テーマは、「病いと制度」と決まりました。特集テーマの趣旨説明は、会報172号（2010年4月発行予定）に掲載いたします。

「特集」に執筆希望の会員は、2010年6月末日までに、氏名・所属、論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際のSubjectは、「『アメリカ研究』特集応募」と明記してくださるようお願いいたします。原稿については、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）上の執筆要項をご覧ください。締め切りは、2010年9月7日（火）必着です。

『英文ジャーナル』第22号原稿募集のお知らせ

The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 22nd issue (June 2011) of the *Japanese Journal of American Studies*. Papers on any topic within the field of American Studies, including those related to this issue's special theme, "Affluence and Poverty," are welcome.

This issue will explore the theme of "Affluence and Poverty" from a wide range of disciplinary perspectives. In general, we welcome papers that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, space, art and architecture, and uses of electronic communications media.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 27, 2010, and should be sent to the JJAS Editorial Committee, JAAS, c/o Center for Pacific and American Studies, University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902. Completed manuscripts will be due May 6, 2010 (maximum 8000 words, including notes). Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue. The JJAS style sheet can be obtained from the JAAS homepage (<http://www.jaas.gr.jp/english/>).

Shitsuyo Masui, Editor-in-Chief, *The Japanese Journal of American Studies*

アメリカ学会清水博賞第15回公募のお知らせ

故清水博会員およびご遺族からの寄付金を基金として、「アメリカ学会清水博賞」が1996年度から設けられております。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された研究書のなかから特に優れた作品を毎年1点ないし2点程度選び、賞状と賞金5万円を贈るものです。

今回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。まず、当該期間（2009年1月1日～2009年12月31日）に刊行された著書で、該当する研究書にお気づきの会員（自薦も可）は、2010年1月10日までに件名「2009 清水博賞候補推薦」にて事務局（office@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

2010年度 第4回名古屋アメリカ研究夏期セミナー（NASSS 2007-2011）参加のお勧め

南山大学において第4回名古屋アメリカ研究夏期セミナー（NASSS）を2010年7月24日（土）～7月27日（火）、4日間の日程で開催いたします。

- I. 2010年年度テーマ：「記憶の共有を目指して」（“Toward a Common Memory of Our Past”）
部門：政治・国際関係部門、歴史・社会部門、文学・文化部門
基調講演者・米国人特別講師：
政治・国際関係部門 — Dr. Robert J. McMahon (Ohio State University)
歴史・社会部門 — Dr. Lisa Yoneyama (University of California, San Diego)
文学・文化部門 — Dr. Marianna Torgynick (Duke University)
- II. 日程：
【専門家会議】（会場：南山大学 名古屋キャンパス）
7月24日（土） 全体会：基調講演 基調講演者による講演と日本人コメンテーターをもとにした全体討論（同時通訳付）
7月25日（日） 部門別会議：3部門に分かれてそれぞれの会場で若手日本人研究者による報告をもとにした討論
【国際大学院生セミナー】（会場：南山学園研修センター）
7月26日（月） 全体会：基調講演者からの宿題に関する討論など
7月27日（火） 部門別セミナー：3部門に分かれての大学院生による研究発表
*セミナーは専門家会議・全体会を除き、すべて英語で行われます。
- III. 参加条件：
【専門家会議】 大学教員・研究者、中学、高校教員であること
【国際大学院生セミナー】 ①原則として修士課程2年次以上の大学院生であること ②7/23の夜から5泊6日で南山学園研修センターにて宿泊可能であること ③専門家会議への参加が可能であること
NASSS 2010 専門家会議および大学院生セミナーの詳細および募集要項は、2010年1月初旬までに下記の南山大学アメリカ研究センター Web サイトに掲載されます。参加ご希望の方は、そこから申し込み用紙をダウンロードし、用紙ご記入後、NASSS 事務局宛てに送付下さい（電子メール可）。
ご不明な点、ご質問などございましたら下記までお問合せ下さい。皆さまのご参加をお待ちしております。

南山大学 アメリカ研究センター NASSS 事務局
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 TEL: 052-832-3111（内線：3426） FAX: (052) 831-2741
Mail: nasss-jimu@nanzan-u.ac.jp Web: <http://www.nanzan-u.ac.jp/AMERICA/index.html>

アメリカ大使館賞の募集—日本で学ぶ大学院生対象の旅費援助奨学金—

アメリカ合衆国大使館からの特別基金提供による旅費援助奨学金の募集を行います。ワシントン D.C.で開催される OAH（Organization of American Historians）の年次大会に1名の大学院生を日本から派遣します。

期間：2010年4月7日～4月10日

場所：ワシントン D.C./ヒルトン・ワシントン

OAH ホームページ参照：<http://www.oah.org/meetings/2010/>

奨学金の金額：1,500 ドル

応募資格：

1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本の大学の大学院博士課程に在籍し、専任職に就いていないこと。
3. OAH 大会の開催時に日本からの旅費を要すること。
4. 日本国籍あるいは日本永住権を有すること。
5. 渡米時に45歳未満であること。

審査結果：2010年1月末日までに、学会 HP 上で公表する予定です。

応募を希望される方は、以下の書類を2009年12月25日から2010年1月14日までの期間に、アメリカ学会事務局 office@jaas.gr.jp に e-mail で送ってください。なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「OAH 大使館賞応募（2010）」と必ず明記してください。

1. 履歴書
2. 出版業績リスト（ある方のみ）。
3. 過去の ASA と OAH 年次大会への参加記録（ある方のみ）。それぞれについて参加年、大使館賞受賞経験の有無、口頭発表経験の有無を明記すること。
4. アメリカ大使館が別に助成している日米協会の「米国研究助成プログラム」奨学金の受給記録（ある方のみ）。
5. アメリカ研究へのあなたの関心と博士論文のための研究計画（英語で500-600語）。
6. 今回の OAH 年次大会で口頭発表を予定している方は、そのペーパーのタイトルと簡略な要旨。

国際委員会

木下 昭 著

『エスニック学生組織に見る「祖国」——フィリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化』

(不二出版, 2009 年, 5,800 円)

本書はフィリピン系の学生組織のナショナリズムについて論じている。使用概念を丁寧に説明し、移民政策やマクロな動向にも目を配った折目正しい研究である。英文ではフィリピン系の人々についての研究が出版されているが、それらは往々にしてフィリピン系アメリカ人のエンパワメントを目的にしたものや文化批評であり、数点を除き、フィリピン系の人々の実像を必ずしも明確に示していない。フィリピン系はアジア系の中では中国系に次ぐ人数を持つエスニック集団であり(72 頁)、その実像を把握できる日本語の著作が求められていたなかで、本書はこの要請に応えており、高く評価できる。

9 章からなる本書では、第 1 章では主要な分析概念である「遠隔地ナショナリズム」を理論的に考察し、第 2 章ではフィリピン系移民の通史を論じている。第 3 章、第 4 章ではアメリカ(特に西海岸)の大学においてエスニシティがどのような重要性を持つに至ったかを論じている。特に、第 4 章ではエスニシティの「希薄化」という論点から日系と比較しており、日系に関心のある人にも読み応えのある内容である。第 5 章から第 9 章はフィリピン系移民の問題や営みをテーマ別に論じている。アメリカ生まれの二世によるフィリピンから来た新移民に対する蔑視(第 5 章)、舞踊とナショナリズム(第 6 章、第 7 章)、移民の祖国訪問に関するフィリピン政府の政策(第 8 章)、フィリピン系学生に対するフィリピンの左翼思想の影響(第 9 章)となっている。

一次資料としては、学生への聞き書きや参与観察を中心に扱っている。聞き書きはやや平板な感想が多いが、フィリピン系の人々の様々な見解がバランス良くテーマに沿って紹介され、それらの見解から事象の意味を読み解いていく方法は適切である。その反面、これら資料の持つ制約から、分析は調査時点に重点が置かれている。2000 年代初頭時点での綿密な描写は、これらのテーマにおいて今後定点観測を行なっていく意味でも、有用であろう。また、本書は学生組織を社会的文脈の中に位置づけており、近視眼的な状況報告に留まらず、フィリピン系の学生の生活や想いをいきいきと描き出している。

このように本書はエスニック集団の実像を描き出すことに成功している反面、ナショナリズム研究としては異なった視点からの分析も必要だったのではないだろうか。アンダーソンのエッセー(“Long-Distance Nationalism”)によれば、本書の分析概念である「遠隔地ナショナリズム」は亡命者や移民が祖国の政治に関わり続けてきた運動である。本書では広義の政治とナショナリズムの分析が希薄である。第 9 章においてフィリピンの国内政治との関係に多少は触れているものの(248-257 頁)、本書の分析枠組みから言えば、フィリピン系学生団体の営みがアメリカの文化政治に対して持つ意義についての言及が欲しかった。

岡田泰平(神奈川大学・講)

島田法子 編著

『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道——女性移民史の発掘』

(明石書店, 2009 年, 4,500 円)

本書は「写真花嫁」と「戦争花嫁」をアジア女性の国際移動という観点から捉え、その生活を社会史の視座から多角的に分析したものである。九本の論文で構成されるこの書に通底するテーマは、主に二点にまとめられる。

まず、アジアから結婚を理由に祖国を出た女性の背景は非常に多様であった。日本からハワイ、アメリカ本土、オーストラリア、ブラジル、そして朝鮮半島からハワイなど、その出発地と到着地は地理的に様々であり、硬直化されたナショナル・ヒストリーの枠組みでは捉えきれない。また、彼女たちの祖国における家庭環境や社会状況も多様であった。「貧しい」「パンパン」などのステレオタイプは否定されねばならない。さらに女性たちの結婚相手の人種やエスニシティは、白人、日系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人など、様々ではない。本書はこれら異なるベクトルを見定めて、丁寧に分析を重ねていく必要性を繰り返し強調している。

次に重視されるのは、花嫁となった女性の主体性である。「写真花嫁」や「戦争花嫁」は本人の意志と無関係で結婚させられたり、経済的事情でやむなく嫁になったりした時代の被害者として扱われることが少なくない。しかし自らの選択で海を渡った女性もいたし、やむを得ず祖国を離れたとしても、新しい定住地での生活を積極的に切り拓いていった女性が数多くいた。本書はこのような女性の努力や決断を掘り取ることで、「一般の女性たちを主人公として歴史を組み立てていく社会史としての移民史」(295)を確立する必要性を訴えている。

さらに本書は今後の女性史・移民史研究に三つの重要な問題を提起している。まず、「花嫁」として渡った女性たちの生活史を再構築するにあたり、研究者は資料といかに対峙すべきか。オーラルヒストリー、アンケート、回顧録などが効果的に使われており、なかでも田村恵子によるインタビュー分析は、「花嫁」たちの言葉の裏に潜む意識を解き明かしていて興味深い。

本書では、ベリナ・ハス・ヒューストンが論じる草の根交流の担い手としての女性や、土屋智子が示す一家の働き手としての「軍人花嫁」の姿など、女性は歴史の周縁ではなく、中心に据えられている。その一方で、「花嫁」たちが男性・白人中心主義的な社会構造のなかで、様々な形で自由を奪われ、権利を制限されてきたことも明らかにされている。そのような圧倒的な「構造の力」と、女性の主体のバランスをいかに取るべきか、本書はこの点についても示唆に富む論文が多い。

また本書は「セトラコロニアリズム」の視点からも興味深い。移民女性の主体性の回復とともに考慮すべき課題は、そのような女性たちがハワイやブラジルの移住先の「コロニアリズム」といかなる関係にあったかという点である。このことについても、一連の論文は多様な観点から考えさせてくれる。

このように本書は日本やアメリカの女性史・移民史に重要な知見を提供し、意義深い問題提起をしている。文体は平易で、論旨も明確であり、この分野の研究者はもちろんのこと、学部学生などにも有益な書であろう。

矢口祐人(東京大学)

日高 優 著

『現代アメリカ写真を読む——デモクラシーの
眺望』

(青弓社, 2009 年, 3,000 円)

写真とデモクラシーという言葉の並びに、写真が映し出すデモクラシーの現実云々などといった凡庸な主題を間違っても思い浮かべてはならない。そうではなく、写真とデモクラシーという、人が下手をすると了解の身振りを許してしまっている事象と概念に、むしろ不断の不透明さを認め、そこを出発点として、手に入る知的道具立てをすべて携えて斬り込んでいくこと、それこそがこの書で賭けられたものである。

写真なるものが内在的に抱え込む幾つもの可塑的側面に細心の注意を払いながら、と同時に、デモクラシーという政治的でも制度的でも思想的でもある概念さらにはジャーナリズムの用語でさえある概念の、時代のなかで揺れ動く軌跡を丹念に辿る作業は、それら二つの事象と概念がアメリカという近代の大いなる実験室で出逢う(出逢い損ねる)さまざまな姿——交差し、すれ違い、衝突し、振じれさせする——をスリリングな筆致で記述し分析する。そこで浮かび上がってくるのは、20 世紀アメリカにおける、人々の意識のなかに畳み込まれ隠されていたいくつもの力線であり、それら力線が織り上げる相貌こそがここで「眺望」と名付けられているものであるといってい。

むしろ、写真とデモクラシーをめぐる抽象度の高い理論的な議論がこの本で繰り広げられるものではない。二つ折りにされた不透明さを解析する著者の筆は、具体的状況のなかに在る個別具体的な写真の群れである。政治経済の水準はもちろんのこと、人々の日常の水準までも視野に収め、デモクラシーをめぐる人々の想いや願い、無意識の欲望や妄想の夢が、写真という身心が双方ともにしかも写す側と観る側の両側からせめぎ合う媒体においてどう切り結ぶのか精度の高い文体でもって炙り出されてくるものなのである。

わたしたちが立ち会うのは、写真論の観点からいえば、アンセル・アダムスの風景、名高い「ザ・ファミリー・オブ・マン」展、リー・フリードランダーのセルフポートレートやドゥエイン・マイケルズのストリート、ビル・オーエンスの郊外やスティーヴン・ショアのロードが、新たな光のもとで照らし出されていく鮮やかな解釈であり、アメリカ論の観点からいえば、西部なるもの、ニューディールなるもの、60 年代なるもの、ポストモダンなるもの、さらには 911 なるものが、従来とは異なった輪郭で測定されていく濃密な論の運びである。急いで付け加えておけば、名指されているわけではないものの、哲学や社会学、現代思想や精神分析の諸理論が文章の背後で周到に配され、それら理論が具体的現象の前で立ち竦む諸限界が透かし彫りにさえされているだろう。

けれども、おそらくは、そうした既存の研究領域のなかでの新しい知見の提示に留まらない過激さこそがこの本の醍醐味である。それは世界各国で現れ始めている、ミッシェル・フーコー以後の真に横断的で鋭利な知性と同じ地平に立つといえるものだ。我が国においてようやく登場しはじめた、こうした世界水準の仕事に大きな興奮を覚えるのは評者だけではないはずだ。

北野圭介(立命館大学)

Masahiro Nakamura

*Visions of Order in William Gilmore Simms:
Southern Conservatism and the Other
American Romance*

(University of South Carolina Press, 2009, \$39.95)

本書は、南北戦争前のサウスカロライナ州で小説家・詩人・歴史家として活躍したウィリアム・ギルモア・シムズに関する研究書である。生前、「小説 24 冊、短編小説 110 編、詩 2000 編」など膨大な数の作品をうみだし絶大な人気を博したシムズであったが、没後は読まれることも少なくなり、その評価も低迷していた。かれが著作のなかで南部の奴隷制を強力に擁護していたこともその一因であろう。「生粋の南部人」であったシムズは、南部人であることに誇りを抱き、当時の南部の主張を色濃く反映した作品を数多く発表した。本書は、これまでのシムズと 19 世紀南部社会に関する研究を十分に踏まえたうえで、シムズの作品に見られる南部性について考察する試みである。

本書の構成は、まずシムズと南部の思想についての全般的な考察があり、そのあとに主要な小説(シムズはロマンスと呼ぶ)の作品論がつづく。最初のところでは、シムズに見られる南部保守主義と社会秩序の意義が論じられたあと、同時代の作家ホーソーソンとの比較をとおして、北部作家の作品には個人主義が顕著にあらわれているのにたいして、シムズの作品には社会と秩序を重んじる傾向があることが指摘される。つづいてシムズの小説がテーマごとに分けられ、3 章では犯罪者を扱った『マーティン・フェイバー』における自我と社会の対立について、4 章では『ウッドクラフト』などにおけるアメリカ独立革命について、5 章では旧南西部辺境を舞台にした『チャールモント』などにおけるアメリカ西漸運動について、6 章では植民地時代を扱った『バスコンセロス』と『イエマシー族』におけるインディアンについて論じられる。どの章においても、他のシムズ研究者の意見を詳細に比較検討し、小説からの豊富な引用を駆使して、それぞれの作品に見られるアメリカ社会・歴史にたいするシムズの見解が明らかにされる中でかれの南部的な捉え方が指摘される。これらの論は、著者がこれまで発表してきた論文がもとになっているので、それぞれを独立した作品論として読むことも可能である。

最近のアメリカ文学史では、著者が述べているように、アンティベラム期北部の文学作品が数多くキャンオンとして脚光を浴びているのにたいして、シムズの作品は、1950 年代以降徐々に研究書はあらわれてはいるものの、一般的にはそれほど注目されることはない。作品のなかには絶版になっているものも多い。著者は、作品に見られる社会と秩序の意義に着目することで、シムズが文学史においてもっと評価されるべきだと訴えている。本書は、奴隷制南部の作家シムズを南部保守主義の観点から再評価しようという意欲的な「チャレンジ」であり、シムズ研究者だけでなく、19 世紀南部の文学や社会を研究するものにとっても示唆に富む有益な書物である。そして、ボウを除けばそれほど関心を向けられることのなかった日本のアンティベラム期南部文学研究に新たな刺激をもたらすにちがいないであろう。

滝野哲郎(大阪府立大学)

舌津智之 著

『抒情するアメリカ——モダニズム文学の明滅』

(研究社, 2009 年, 2,800 円)

本書はアメリカ文学における「抒情」と「モダニズム」という（一見相容れない）概念を再定義することで、モダニズム文学解釈に新たな光を投じる画期的かつ重厚な研究書である。「抒情」と「モダニズム」？とまずは首をひねるのが、従来のモダニズム解釈に馴染んだ者の自然な反応だろう。あるいは、そもそも「抒情するアメリカ」というタイトルは自家撞着ではないか、という反応もうなずける。著者も言うように、歴史的に前進的な夢や自由を希求してきたフロンティア・スピリットの国アメリカと、比較的成熟した文化においてゆるやかにたちのぼるはずの抒情性とはいかにも座りが悪く、また近現代においては物質主義や軍事力など暴走的な価値で知られるアメリカで「勇氣」や「雄々しさ」ならいざしらず、密やかな静けさのうちに甘美な情緒を吐露するような心性は反アメリカ的とさえ言える。そしてそのようなアメリカが生み出した文学のなかでも、ロマンティシズムへの反動という成立ちゆえ、ことさら抒情性を廃した文学的模式として知られるモダニズム文学。これらアメリカとモダニズムに著者が正しく見いだしたのが、ほかでもない抒情性であった。なるほど、過剰は構造的に抑圧を内包するものである。許されぬがゆえに切望され、抑圧ゆえに帰属する、逆説の領分——抒情。

かくして「闇の深さによって微光をすくいとる」べく、明滅するアメリカのモダンな抒情を跡づける本書は、またモダニズムという時代区分とその作品の幅を従来よりも押し拡げている。射程に収めるのは19世紀後半から一世紀ほど、しばしばプロト・モダニストと理解されるメルヴィルをさらに「ロマンティック・モダニスト」と捉え直して議論の始点とし、ハイ・モダニズムを経て、「拡大モダニズムの射程」と題される第三部ではT・ウィリアムズの戯曲やピーチ・ボーイズの音楽作品までもアメリカン・モダニストの正統な末裔と捉える。つまり、そもそも抒情が抒情詩というジャンルと不可分であり、またこれまでモダニズム批評において演劇や音楽作品が十全に議論されてこなかった以上、氏はジャンル論においても拡大・越境を試みていることになる。

各章とも出色の完成度で学ぶことは多いが、本書を貫くメッセージのひとつに文学批評の立ち位置をめぐる議論があるように思われる。「時代や国家が頬を濡らして泣くことはない。涙を流すのは、いつも一個人である」(第五章)。帯にも繰り返されるこの言葉からは、あらかじめ社会的である身体、あるいは個人的なことはすべからず政治的であるという了解を経た今日なお、個人の涙を「大きな物語」のために蹂躪し画一化してはならないというメッセージが聞こえてくる。それは読者が素足で作品に立つ読書体験から、時にあまりにも遠く離れてしまう文学批評の方法論そのものへの警鐘ではなかるうか。

いずれにせよ「抒情」を掲げ上げる氏の読みによって、たとえば『白鯨』のエイハブの痛みが改めて心に突き刺さる。すぐれて合理的でありながら感情をゆさぶる批評というのは撞着であろうか。あたかも矛盾のモード、抒情の本質を本書そのものが体現しているかのようである。

小笠原亜衣 (立教大学)

下河辺美知子 編著

『アメリカン・テロル——内なる敵と恐怖の連鎖』

(彩流社, 2009 年, 2,625 円)

「アメリカ」と「テロ」、この二つの単語を並べて9.11を想起しないではもはや不可能であろう。第一線で刺激的な仕事を展開するアメリカ文学、文化研究者たちが執筆陣に名を連ねる本論文集も当然この「同時多発テロ」に注意を払い、時に詳細な考察を加える。しかし、事件以降頻繁に目にする「市民への無差別な攻撃」を意味するテロリズムという語の一般的な用法に基づいて9.11を解説することは、本書の主眼ではない。むしろ、『アメリカン・テロル』は、「ある権力によって統一された秩序を内部から破壊する」テロリズム、およびアメリカという共同体に遍在する「恐怖という心的ダイナミズム」(共に下河辺)の系譜をたどり、同国の形成、発展につきまとうテロルの重層性を様々な角度から検証する。扱われるのはチャールズ・ブロックデン・ブラウンからウィリアム・フォークナー、ドン・デリーロ他現代作家にいたる上、文学にとどまらず演劇やヴィジュアル芸術を含めてジャンル横断的に議論が繰り広げられる。

特筆すべきは、文学テクニスを精読して新しい文学史の可能性を探る、あるいはテキスト解釈の限界を押し広げるという文学研究の当然の手法が極められる一方、本書が新しい形のアプローチを提示する点だ。例えば、権田論考は、アメリカで急増する「極右主義者たちの反政府主義」が、「本来は回顧的で受動的である報復という行為が、むしろ投機的で能動的な行為としてあらわれ」るパラノイアによって駆動されることを看破する。この指摘はテキストの具体的な読解によって裏打ちされ、その意味で伝統的な文学研究の方法論ののっぴきないものの、しかしながら、かつてないほどに未来志向でもある。より正確には、書かれたテキストよりも必然的に後世を生きる読者＝われわれにとっても未来の問題として現れることが顕著なテロの恐怖と向き合うには、錯綜した動的な過程をとらえ記述する批評能力や先見の理論的先鋭が従来以上に必要になるということなのであろう。その意味で、精神分析批評の立場からトラウマの表象や共同体の記憶のあり方に着目する、様々な意味で「前向き」な文学、文化研究の動向に関わってきた下河辺こそが本書の編著者である意義は大きい。

他方、本書が最終的に示唆するいま一つの恐怖は、「アメリカン・テロル」がもはやグローバルなものとなった現状である。すなわち、9.11がアメリカン・テロルの系譜に位置づけられるとき、アルカイダ他テロ集団はアメリカという国家を外から攻撃したと同時に、アメリカ化したグローバル社会の内に存する敵とも見なされるべきなのである。だとすれば、「＜部分＞を＜他者としての＞全体」に格上げする「＜テロとの戦い＞というレトリック」(下河辺)は、地球上に存在する部分でありながら限りなく異質な他者という二律背反的な存在としてテロリストたちを定義することになる。本書が言外に見据えるのは、このように様々な境界をめぐる内と外の臨界現象を引き起こす(グローバル・)アメリカン・テロルのダイナミズムに他ならないはずだ。だからこそ、本書はこの圧倒的な問題に取り組む者にとって必携の書となろう。

辻 秀雄 (首都大学東京)

都甲幸治 著
『偽アメリカ文学の誕生』

(水声社, 2009 年, 2,800 円)

刺激的な表題だ。一般に「偽」モノは「真性」が何を根拠に「真正」性を保持しうのかという問題を逆照射してみせるものだが、国民国家的な枠組みの虚構性が暴かれ、真正なアメリカ文学はどこにもないということが既に明らかな今、あえて自ら「偽」を名乗ることにいかなる戦略があるのか。都甲は自らのアメリカ体験を通してその「偽」の由来を語ってみせる。「日本の私」がアメリカ文学を研究することをどう正当化しうのか。この国でこの業界ができて以来連綿と抱えられ続けてきた苦悩であろう。この率直な告白だけでも、大学というシステムに守られて日本でアメリカを研究する我々自身のありかたを考察する上で一読に値する。そしてこの疑問に対して都甲が取るのが「偽」というポジションだ。自分には「本物のアメリカ文学を生み出すことはできない。しかし創作や翻訳という形で、それを材料とした偽物は作れるのではないか」という発想。

全体の構成は緩やかで形式も様々、統一した主題を求めるでもない。共通しているのは「書き手・都甲幸治」という事実だけである。だから内容に重複が見られたり、各章で読みのアイディアは豊富に提示されるのにそれを絡めとる結論がないままなのも、編集形式上仕方ないのかもしれない。しかしそういった些事よりも、この優秀な翻訳家が紹介してくれるアメリカの新しい作家の情報や、アメリカ文学への新しい視点を楽しむのがこの本の正しい読み方であろう。ケン・カルファスやジュノ・ディアスについてこんなに丁寧に紹介してくれる日本の媒体などほかには存在しないのだから、それだけでもありがたい。

村上春樹の初期2作品が海外では「なかったことになっている」ことを論じた2つの章が興味深い。都甲は村上の海外メディアでの発言を丹念に拾って、作家が文化的境界を隔てて使い分けるセルフイメージを浮き上がらせる。いわば「偽」アメリカ作家としてのムラカミと日本作家としての村上を対照してみせる。アメリカ的なものに惹かれ、その文化を吸収し、「決してアメリカ人になりきることはいけない」し「純粋な日本人に戻ることもできない」と言う著者なりのスタンスに村上春樹という題材は格好である。日米両者間の境界が、じつはグラデーションのなかに無理矢理引いたあとづけの線に過ぎず、文化や人の流動性が易々とその線を超えることの典型的な例が、アメリカ文学を読んで作家になった村上に、そして彼の作品を読む各国読者の読書体験、およびその相互作用に見られるからだ。そのとき「偽」は確かに「真性」に疑義を挟みその絶対性を揺さぶる。

だからこそ「偽アメリカ文学」というキャッチーなフレーズはもう少し慎重に定義してほしかった。村上の作品やアレクシーのようなマイノリティ作家の作品、あるいは都甲によるアメリカ小説の日本語訳がそうだとすると、本書のエッセイ群が「偽アメリカ文学」だというのは、意味合いが違ふ。とはいえ「偽アメリカ文学」はまだ「誕生」したばかりである。次にはもっとはっきりした輪郭を持った「論」として現れるのを期待したい。

秋元 孝文 (甲南大学)

佐川和茂 著
『ホロコーストの影を生きて—ユダヤ系文学の表象と継承』

(山交社, 2009 年, 2,000 円)

本書はユダヤ系作家によるホロコースト文学に関する研究である。ホロコーストとは「ヒトラー第三帝国の支配中、ナチスが600万といわれるヨーロッパのユダヤ人を大量虐殺した事実を示す言葉」である(引用はすべて本書より)。人類史上例のないこの殺戮は、人間が残忍でありうる可能性の極限を示しているがゆえに、人間とは何かという問いに対する準拠枠として機能することになる。本書によれば、ホロコースト文学とは、ホロコーストを主題とするか、もしくはその影響が濃く刻まれている作品のことである。本書が主として扱う合衆国在住のユダヤ系作家はホロコーストの生還者もいるが、多くはそれを実際に体験してはいない。しかし、ホロコーストはユダヤ系作家の創造力に深甚な影響を及ぼし、多くがその直接もしくは間接の体験を映し出す作品群を世に送った。本書は、それらの作品群を通してホロコーストと今日の世界との共通性を浮かび上がらせ、そのような理不尽な暴力に直面した時人はどうすべきかといった問いに応答しようとしている。

第一章では、第二次大戦以降出版された合衆国のホロコースト文学を、ヨーロッパのそれと比較する。ホロコーストの体験を証言者として語るヨーロッパの作家とは異なり、アメリカのユダヤ系作家たちは「沈黙する神への疑念と信仰との間を揺れ動」きながら、ホロコーストを現代社会へと照射することに力を注いだ、と論じる。第二章以降は、ソール・ベロー、バーナード・マラマッド、アイザック・シンガー、イスラエル・シンガー、エドワード・ウォーラント、エリ・ヴィーゼル、アモス・オズ(イスラエル作家)、ヘレン・エプスタインといったユダヤ系作家の作品が、章ごとに考察される。

ベローを扱う第二章では、ホロコーストについて直接語ることを避けた『ハーツォグ』までの作品と、ホロコーストの生き残りを主人公にした『サムラー氏の惑星』を比較、考察する。著者は、ベローの歴史認識の深化と「滅亡の危機を克服し存続への道」を切り開いていこうとする強い意図を読み取る。第三章のマラマッドも、ホロコーストという「遠景」を身近な日常生活へとみごとに照射した作家である。著者は、マラマッドが、『アシスタント』から『神の恩寵』に至る作品を通してホロコーストを多面的・重層的に描きだすことによって、「破壊された人間性の回復」へと向かうさまをたどる。

第四章は、ヒトラーによって奪われたユダヤ世界のイディッシュ語での復元を試みるシンガーを扱う。彼が、ホロコーストの狂気を告発すると同時に、ホロコースト以前の罪、人間存在そのものに内在する罪をも抉りだそうとしていることに著者は注目する。そして第七章では、ホロコーストを生き延びた作家ヴィーゼルを論じる。本書によれば、数少ない生還者としてアウシュヴィッツを記憶化する言葉を紡ぐ作家は、また、ディアスポラ・ユダヤ人として、中東で孤立するイスラエルを魂の故郷と考える。本書は、著者のユダヤ文学に対する長年の研鑽が凝縮した優れた一冊である。高度に専門的でありながら、反戦という普遍的なメッセージを伝えている。

鵜殿えりか (愛知県立大学)

入子文子, 林以知郎 編著

『独立の時代——アメリカ古典文学は語る』

(世界思想社, 2009 年, 1,995 円)

エイブラハム・リンカーンを守護神のように掲げながら登場したオバマ第 44 代大統領が、アメリカの国家的自意識における南北戦争の歴史の重要性を改めてアピールした観があるなかで、本書『独立の時代——アメリカ古典文学は語る』は、フレンチ・アンド・インディアン戦争および第 2 次米英戦争を含む広義のアメリカ独立の時代を、21 世紀の文脈に立って包括的に捉えなおそうとする試みである。「まえがき」では、本書が、9.11 同時多発テロ以降、建国の歴史への国民的な関心が高まりを見せた時勢を直接の背景として構想された企画だと述べられている。しかし、総勢 9 名の執筆者による質の高い論考は、独立革命が、決して、昏迷の中にあるこそ意識化される美しい過去、回復すべき理想として単純に理解されるべきものではなく、むしろ、アメリカの「今」さえを左右しかねない国家的矛盾の起源を成す歴史でもあり得たことを浮き彫りにしている。断絶による始まりを統一と継承の物語に立上げてゆくという独立の時代の使命感こそが、アメリカの文学、そして、歴史を動かす原動力となって、アメリカの発展を支え、また逆に、アメリカを困難や恐怖へと落とし入れてきたのである。アメリカの歴史は民主主義の発達史としばしば同一視されがちところで、革命起源の国家として、矛盾を演じることを余儀なくされたアメリカの道程を、主に文学テクストの精読を武器に辿ってみせるところが本書の醍醐味であるといえるだろう。

本書の構成は以下の通りである。第 1 章「建国の父たち——ワシントン、アダムズ、モンロー」(巽孝之氏)、第 2 章「売れる偉勲、憂うる遺訓——ウィムズの『ワシントン伝』再考」(白川恵子氏)、第 3 章「『開拓者たち』と家系譜の書き換え——上機嫌な時代の自己意識的なアメリカニズム」(林以知郎氏)、第 4 章「北米毛皮交易の原風景——アーヴィングの『アストリア』の意義をめぐって」(齊藤昇氏)、第 5 章「『ある鐘の伝記』を読む——ホーソーンにおける歴史と詩学の交錯」(入子文子氏)、第 6 章「『継承』と『革命』のはざま——メルヴィル作『ピエール』を読む」(福岡和子氏)、第 7 章「ジェイムズ家とアメリカ独立期」(水野尚之氏)、第 8 章「アメリカの始まりに目を凝らして——マーク・トウェインの〈インディアンタウン連作〉」(里内克巳氏)、第 9 章「記念碑が創る独立戦争の記憶」(和田光弘氏)。これらのタイトルを概観しただけでも、その分析対象の多様さ、時代的な広がりから、独立の時代の包括的な再評価という本書の目的の深さを窺い知るには充分だろう。革命起源を問題化することによって浮かび上がるアメリカの無意識は、実に、我々の意表を突くものばかりであって、アメリカを語るための新たなパラダイムとしての独立革命の有効性を否応なく実感させられる。『独立の時代』は、南北戦争の成果を前景化するオバマ政権を背景に読むからこそ、より深遠なるアメリカ理解に私達を導いてくれるのである。

若林麻希子 (青山学院大学)

北米エスニシティ研究会 編

『北米の小さな博物館 2』

(彩流社, 2009 年, 2,310 円)

『北米の小さな博物館』(2006 年)の続編である本書は、ジェンダーや人種・エスニシティの視点から、主としてそれらに関わる北アメリカの博物館を取り上げた本である。前著と同様、北アメリカのジェンダー、人種・エスニシティ、階級、世帯の問題について共同研究を行っている北米エスニシティ研究会が編集している。

ここで取り上げられている博物館の多くは、「北アメリカの博物館」と聞いて一般に想起されるような、大都市にある著名な美術館や歴史博物館、自然史博物館ではない(それらも数館取り上げられてはいるが)。書名に「小さな博物館」とあるように、例えばシラキューズのエリー運河博物館やニュー・オリンズのマルディ・グラ博物館といった、特定のテーマや対象に焦点を当てた博物館や、その地域やそこに住む人々の歴史に深く関わる博物館が多く選ばれている。本書はこのように、広くは知られていない博物館を取り上げた上で、さらに、通常は「博物館」とみなされない多様な対象——国際機関(国際連合本部)、国立公園(カウパバ国立歴史公園、プレシディオ・オブ・サンフランシスコ)、私有地の墓碑(おけいの墓)など——を選択しているところに大きな特徴がある。それらには、各地域の歴史や時代が刻み込まれており、博物館と同様に、北アメリカの社会や文化を伝えてくれるのである。

本書のもう一つの大きな特徴は、それぞれの項目の叙述の仕方にある。博物館の概要や設立の経緯を中心に論じている項目もあるが、多くの項目は、その博物館が対象としている史実や事象に関する記述が中心となっている。つまり、本書は、博物館自体についてと言うより、その博物館が扱っている対象について学べるようになっており、博物館に展示された品々を前にしてその解説を読むかのような体験を与えてくれる。博物館の存在をきっかけに語られるのは、例えば以下のようなトピックである。ナヴァホとメスカレロ・アパッチの強制移住の歴史、19 世紀アメリカにおけるギリシア熱、ヴァージン諸島とデンマーク文化、ハワイのハンセン病とカトリックの奉仕活動、アメリカにかつてあった捕鯨文化、五大湖と大西洋を結ぶエリー運河の建設、アメリカ本土への初の日本人入植、多様なマルディ・グラ文化、シアトルのニホンマチ、ハワイのキリスト教化、ボーイスカウト運動、モルモン教徒の西部移動、セツルメント運動、アメリカにおけるチェコ系・スロヴァキア系移民、ユダヤ系アメリカ人の食事と宗教、カナダ先住民シュスワップなどである。博物館をてがかりに、このような多様な文化の存在を教えてくれる本書は、北アメリカの歴史と文化を学ぶための良き導入となるだろう。

多様な文化の中で本書が特に焦点を当てるのが、マイノリティに関する記述である。本書の「はじめに」が指摘するように、アイデンティティの再構築の視点に加えて、各博物館が多文化主義の動向とともに共生の道を歩もうとしている様子が随所に描かれている。過去だけではなく、現代の北アメリカについて知る上でも本書が良書となっている所以である。

加治屋健司 (広島市立大学)

2009 年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：津田塾大学

アメリカ政治分科会

本年度のアメリカ政治分科会は「アメリカ政治の地殻変動」と題して、昨年同様二つの報告をもとに議論を行った。報告内容は、前嶋和弘会員の「アメリカの政治報道の変化とその影響」、川上耕平会員の「冷戦初期アメリカにおける保守主義」である。分科会の企画趣旨は2008年選挙におけるオバマ民主党の勝利を長期的な政治の構造変化に位置づけて考察することにあった。前嶋会員は、20世紀末に保守派、リベラル派の双方が報道のイデオロギーの偏向を訴えたことで、メディアの政治的中立性に対する信頼が揺らいだこと、CATVやネットの発展によってメディアが特定のイデオロギー的立場を持つ層を対象にした「政治情報提供」機関の性格を帯びてきたことを示した。川上会員は政党イデオロギーの再配置が起こる際のダイナミズムを冷戦初期の事例で論じ、民主党主流を軸に冷戦コンセンサスが成立したとき、共和党の中心人物タフトがanti-statismと反共主義に引き裂かれて、政策的信頼を失っていく有様を分析した。今日、ブッシュ政権の政治運営に国民が失望し共和党保守主義の権威が失墜しつつあるといっても、民主党が新たな政治的コンセンサスを構築する環境はいまだ十分に整っていないことを、メディアと政党イデオロギーの観点から確認したセッションであった。

(中野博文)

冷戦史研究分科会

佐々木豊会員が、「1950年代初頭の下院議会調査委員会とカーネギー財団」と題して報告した。「赤狩り」旋風の下、米国議会下院特別委員会（カックス及びリース委員会）において、知識の生産や高等教育機関への助成動向を巡る論争が、保守派議員・知識人とリベラル・エスタブリッシュメントを代表する財団幹部の間で交わされた。報告は、論争が、一つは知的・文化的覇権を巡る争いの性格を持ったこと、二つは、冷戦初期の政治文化が「冷戦リベラリズム」によるコンセンサスという一枚岩的なものではなく、アメリカのあるべき政治社会秩序観を巡って内部に分裂的要素を含み、後に本格化するリベラルと保守のイデオロギー対立を胚胎するものであった点を強調した。それに対して、島田真杉会員は、戦後政治史研究における佐々木報告の位置づけと意義を説明したあと、報告では財団の研究支援の方針が「国益第一主義」であったと述べるにとどまり、「公益」の観点からその方針の中身を当時の学界の動向と比較しながら検討する必要があるのではないかとコメントを行った。加えて、「冷戦リベラリズム」のキー概念についても分かりやすい説明があった。参加者の間からは、山田康博会員が、カーネギー財団以外に議会調査の対象となった財団はなかった否か、さらに寺地功次会員は、カックス及びリース委員会と下院非米活動委員会それに上院の通称マッカラン委員会との関連性、この問題に関してアイゼンハワー政権との連続・非連続性について質問した。また、上英明会員や服部雅子会員からは、民間防衛に関する質問、それに1950年代初頭と「レッド・スケア」など、前後の時代との連続・非連続性を尋ねる質問があった。活発な質疑応答が示唆するように、本報告は史料を丹念に読み込んだ手堅く、冷戦文化研究に一石を投じる意欲的な論考であった。

(松田 武)

日米関係分科会

本年度の日米関係分科会では多数の出席者を得て、「オバマ政権の軍備管理軍縮政策と日米関係」をテーマにオバマ大統領がブラハで発表した「核のない世界」を契機に日米間で論議が活発になっている軍縮と抑止に関して活発な論議が行なわれた。

まず、向和歌奈氏（東京大学院）から「オバマ政権と核軍縮・不拡散への課題」について「不拡散体制促進による二つの亀裂（軍拡や核拡散と不平等性）がある」との報告が行なわれた。次に、秋山信将会員（一橋大学）から「米ロ核軍縮の日米同盟へのインプリケーション」に関し「核軍縮を推進する一方、いかにして拡大抑止の信憑性を確保するか」といった二つの矛盾するかに見える課題を克服するか」につき報告があった。さらに、佐藤丙午会員（拓殖大学）から「オバマ政権の不拡散政策と日米関係」に関して「オバマ政権の不拡散政策はブッシュ政権やクリントン政権とはレトリックの違いは見られてもそれほど差異はない。今後、不拡散を目的に核軍縮が進むことの戦略的な意義に注目する必要がある」旨の発表があった。最後に有江浩一氏（拓殖大学）から「アメリカの対西独拡大抑止」につき「20世紀中旬に西ドイツがNATOと核共有を行うことによりいかに拡大抑止を担保したか」についての報告があった。その後、会場からオバマ政権の核政策とその日米関係への影響を中心に活発なコメントと質疑応答が行われた。（川上高司）

アメリカ女性史・ジェンダー分科会報告

今年度の部会では、まず森田麻美さんが「白人奴隷制研究の動向と課題」について詳細な報告を行い、その後、フロアから活発な質疑が交わされた。続いて、豊田真穂さんから、ジェンダーバッシングに対抗する意味で、女性たちの活動をつなぐネットワークについての紹介があり、その他の参加者からもさまざまな情報が寄せられた。さらに、参加者をつなぐメーリングリストも立ち上げられた。研究と社会活動を結ぶ視点は女性史・ジェンダー研究において不可欠なものである。その意味で、アメリカ女性史・ジェンダー研究部会の今後の活動は大いに期待できると実感した。

(栗原涼子)

アジア系アメリカ人研究分科会

5月はアジア系、並びにパシフィック・アイランダー系アメリカ人の月間であったが、150年前の最初の移民到着から今日に至るまで、彼らの米国社会への貢献が認識される中、日本でのアジア系アメリカ人研究も盛んだ。

本分科会では第一発表がニューヨーク市の日本人／日系コミュニティについて、第二発表がロス・アンジェルスのアジア系アメリカ人についてと、大都会の中のマイノリティという接点のもとに開催された。

「ニューヨークにおける日本人・日系人コミュニティの形成」(飯野朋美)

ニューヨークへの日本人の流入は19世紀終わりに始まった。全体数は西海岸に比べ少ないが、大都市の性格上、ビジネス従事者、政府関係者、留学生、芸術家などが多く見られた。また、日本からアメリカの軍艦に雇われ、ニューヨークで上陸した船員たちが家庭内労働に従事していた例も多かった。そのような日本人の相互扶助のために1907年に日本人共済会(のちのニューヨーク日系人会)が作られた。それから100年。日本人・日系人を取り巻く環境は歴史のなかでさまざまに変化し続けている。現在、ニューヨーク市における永住者、長期滞在者を含めた日本人の数は6万人を超え、日系人を含めるとかなりの人口になる。そのようなニューヨークの日本人・日系人社会の歴史的概観と現在活動するいくつかのグループ事例から、コミュニティの形成について考察した。

「ロス暴動と“people-watching” —Anna Deavere Smithの*Twilight: Los Angeles 1992*; Karen Tei Yamashitaの*Tropic of Orange*」(寺澤由紀子)

ロス暴動に関わった人々の生の声を彼ら自身の言葉を使って再現したAnna Deavere Smithの1人舞台、*Twilight: Los Angeles 1992*、そして、政府機関のホームレス集団に対する発砲という虚構の事件の中でロス暴動への言及をちりばめたKaren Tei Yamashitaの小説*Tropic of Orange*。これら二作品は、ロス暴動が、黒人対白人、あるいはアフリカ系、韓国系、ヒスパニック系という枠に限られた問題ではなく、その境界が流動的なものであることを示唆すると同時に、現実と虚構の境界を不明瞭にすることで、メディアを通して流された映像のみを「事実」として捉えがちな我々に対して、その「事実」に疑問を投げかけ、その向こうにあるものを見極めるよう促している。本報告では、これらの作品が提示する、こうしたロス暴動の想起のあり方について考察した。

(野崎京子)

アメリカ先住民研究分科会

発足以来4年目を迎えた本分科会では、初年度以来アメリカ先住民研究の領域的広がりや学際化を確認する機会を提供するために、毎年多様なアメリカ先住民研究の動向を紹介してきた。すでに前回までに日本における歴史学および人類学の研究動向、アメリカにおける都市研究、表象研究、文学、ジェンダー研究、環境問題に関わる研究動向が紹介されてきたが、今年度は人種間関係史および現代史の研究動向が2件報告され、35名の参加があった。

まず初めに岩崎佳孝氏(立教大学アメリカ研究所)が「先住アメリカ人と黒人解放民に関する研究の動向と今後の展望」と題して、南北戦争後の黒人解放民と彼らの元所有者であった所謂「文明化された五部族」との関係に関する研究の動向を紹介し、アメリカ先住民を一方的な歴史の被害者として論じる視点をもつ問題性について指摘した。続いて内田綾子氏(名古屋大学)が「アメリカ先住民と1960・70年代」と題して、1960年代・70年代におけるアメリカ先住民の意識覚醒や社会運動、連邦政府の先住民政策の転換に関する研究の動向を紹介し、それが一般のアメリカ現代史研究における60年代・70年代の見直しの動きとどのように連動しているのか、また当時の意識覚醒、社会運動、政策の転換が実際のアメリカ先住民の状況に今日どのような影響を及ぼしているのか論じた。

どちらの報告も、これまでの定説を覆そうとする研究が活発化してきている現状を伝えるとともに、アメリカ先住民研究を行なうことの政治性を改めて確認するものであった。報告者と参加者の間の質疑応答は熱を帯び、分科会に与えられた時間内にはおさまらず、閉会以後も報告者と一部参加者の間では個別に議論が続いた。

(佐藤 円)

経済・経済史分科会

経済・経済史分科会では、近年注目されてきた州政府による企業誘致の問題と地域経済発展との関連について、環境社会学の視点から原口弥生会員（茨城大学）から報告がなされた。企業優遇措置は、1980年代以降、マイノリティを主体とした環境正義運動の展開を受けて変化した。報告は、ルイジアナ州政府が低所得のアフリカ系アメリカ人住民の居住地域に、多国籍企業の石油化学工場を誘致した政策を事例として取り上げており、この事例を企業優遇措置の歴史的変容過程の中に位置づけて論じた。同州では政府による企業への財産税減免措置が地元の雇用創出に結びつかず、また優遇措置を受けた企業による環境法違反も多く見られ、地域環境の悪化・貧困の悪循環がもたらされた。さらに、1980年代後半には改革派知事のもと、労働者・住民の視点に立って設立された地元NPOなどの運動の影響を受け、環境汚染規制での実績を免税率に反映させる環境スコアカード対策が導入されたが、短命に終わった。報告は、こうしたルイジアナ州の経緯を踏まえたうえで、環境正義運動の解釈とその限界を、南部経済発展の歴史的独自性、保守的工業化議論の枠組みの中で論じた。フロアからは、地方の企業誘致と地域エリートとの関係、北部都市の事例との比較、公民権運動や労働運動との結びつきなどに関する質問やコメントが出され、さまざまな角度から議論が行われた。経済・経済史研究に重要な視点を多く提供する刺激的な報告であった。

（柳生智子）

19世紀史分科会

本年度の分科会は、3回にわたる「長い19世紀」というテーマでの最終回の報告会で、過去2回の分科会と同じように、3人の報告者が報告をした。今回の報告者は藤本茂生氏、朝立康太郎氏、常松洋氏の3人で、報告の後に、フロアから質問・コメントを受け、報告者がそれに答えるという部会形式をとった。司会は、田中きく代がつとめた。

「長い19世紀」というテーマは、18世紀末から20世紀初頭、時には第2次大戦ぐらいまでの長いスパンで19世紀を捉えようとするもので、いつを起点としいつを終点とするかという測定と、その長いスパンに共通する特質をみいだそうとするものである。過去2回の分科会でも、18世紀末から20世紀初頭という長い世紀の始まりと終わりを、政治、社会、文化の側面から確定しようとしてきたし、「19世紀的民主主義」の有り様における共通性を探ってきた。これらを踏まえて、今回の報告では、具体性を持たせることと、全体の総括を試みた。ボーイスカウト運動という青少年活動を通して、20世紀との区切りを模索する藤本報告と、憲法修正第13条の意義を強調することで共通点をみいだそうとする朝立報告では、「長い19世紀」の概念を具体化することができ有益であった。また、「長い19世紀」の概念を説明概念とするだけでなく、分析概念としても有用性を高めるために、「短い19世紀」という設定をも提示し、批判的に総括する常松報告は、3回にわたる分科会報告を締めくくる意味でも刺激的であった。

歴史学の方々のみならず、その他の分野の方々の出席も多かった。従来にないような質問も多く、報告内容のみならず、質問やコメントも刺激の多い報告会となった。これを、ベースに、近い将来に部会報告のような機会を持ちたいと思っている。また、分科会の方も、少し時間をいただいて、19世紀史の新たなテーマをも提示したいと考えている。

（田中きく代）

初期アメリカ分科会

本年度の初期アメリカ分科会ではヨーロッパと新大陸のつながりを検討すべく、先住民を描いた図像を扱う2本の報告を立てて、13名の参加者をえた。増井志津代（上智大学）は「ジョン・ホワイต์によるネイティヴ・アメリカン表象」で、1580年代にロアノーク植民地周辺の先住民を描いたホワイットの水彩画を紹介しながら、それらの作品は1560年代にフロリダを探索して先住民を描いた改革派プロテスタントのルモワヌに続くものであること、またホワイットの作品にもとづいて1590年代にフランクフルトで出版されたテオドル・ド・ブライの版画が、16世紀プロテスタントの国際ネットワークに媒介されていたことを紹介した。つづいて橋川健竜（東京大学）は「18世紀ブリテン帝国の戦争と先住民の表象」でイギリスにおけるモホーク族の図像をとりあげ、18世紀はじめにロンドンに渡ってアン女王に謁見したいいわゆる「インディアン四王」の肖像画（1710年）と、フレンチ・アンド・インディアン戦争中のアブラム平原の戦いを扱ったベンジャミン・ウェスト『ウルフ將軍の死』（1770年）を中心に、英仏対立の下で、先住民と正規軍の位置づけがそれぞれの描き方によってどう表れたかを論じた。参加者とのあいだで、個々の図像の解釈にくわえ、ルネサンス絵画の流れと先住民図像の関係、18世紀北米大陸を象徴するのは先住民・ヨーロッパ系入植者・正規軍のいずれか、などをめぐって活発な議論がかわされ、大西洋・旧大陸にも目をむけるアプローチの可能性が大いに感じられる、充実した分科会となった。広く大西洋世界も含めた検討の場として、今後も活動を続けていきたい。

（橋川健竜）

『アメリカ研究』の電子アーカイブ化についてのお知らせ

会報 169 号でもお伝えしました通り、アメリカ学会では、日本学術会議の進めている学会誌の電子アーカイブ事業に協力し、本学会誌『アメリカ研究』が多くの人の目に触れるようにするため、同事業を具体的に推進している科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency: 通称 JST）のプログラムに応募しました結果、本誌の電子アーカイブ化事業が採択されました。アーカイブ化の対象となりますのは、『アメリカ研究』創刊号（1967 年）から、第 41 号（2007 年）までの各号です。アーカイブ化の作業は現在進行中で、2010 年の初頭にはその作業が終わり、所定の手続きを経て、オンライン上で公開される予定です。アクセスの方法等につきましては、後日、本会報上で連絡致します。

アメリカ学会常務理事会

新入会員

徳田勝一	東京大学	史 米
宮永隆一郎	一橋大学	文 思
山口和彦	東京学芸大学	文
辻 裕美	お茶の水女子大学	文 女 衆
秋葉美知子	活水女子大学	芸 社
井村俊義	國學院大學、東洋英和女学院大学	民 思 米
DIFILIPPO, Anthony	Lincoln University	外 日
谷岡知美	広島学院大学	文 衆
藤原郁郎	大阪大学	政 外 史
PRONKO, Michael	明治学院大学	芸 衆 文
及川（繁沢）敦子	広島市立大学	政 史
BLOUIN, Michael J.	同志社大学/Michigan State University	日 地 米
小笠原亜衣	立教大学	文 芸 米
杉野俊子	防衛大学校	言 米 言語政策
岡田泰平	国士舘大学	史 米 言
OWENS, Christina	Univ. of California, Davis	民 日 女
宮下忠也	同志社大学	芸 米 衆

編 集 後 記

太平洋を隔てた日米双方で、今年民主党政権が「チェンジ」を掲げて成立した。どちらも劇的な政権交代であったが、両政権とも前世紀から先送りされてきた厄介な諸課題に直面し苦闘しているように見える。政権発足当初の熱狂は醒め、いまや具体的な改革の実行力が試される時

期である。アメリカ研究者として求められているのは、世論形成に圧倒的な影響力をもつメディアに対して健全な距離感を保ち、アメリカの過去と現在を冷静に分析する姿勢であろう。編集委員はかなりの実労働を伴うが、学術誌としての高水準を保てるように頑張りたい。

(Y.H.)

2009 年 11 月 30 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科附属

アメリカ太平洋地域研究センター気付

Tel & Fax (03) 5454-6163

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 有 賀 夏 紀

編集人 中 條 献

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12